

資料紹介

貝製仮面(かいせいかめん)

今回紹介する貝で作られた「仮面」は、大正5年(1916年)に熊本市南区城南町の阿高貝塚で発掘調査が行われた際に多数の土器と共に出土したものです。貝塚は食べた貝の殻を捨てた場所といわれています。この貝製仮面はカキ(牡蠣)で作られています。阿高貝塚ではカキやハイガイなど、海で獲れる貝の殻がたくさん出土することから、縄文時代の人々もカキを食べていたことがわかります。仮面に使われた殻はかなり大きく、私たちが食べているカキと比べものになりません。これまでは仮面を作ったカキは「イタボガキ」という種類とされていましたが、細かな調査の結果「スミノエガキ」という種類であることがわかりました。

国内で貝製仮面の出土は7例ありますが、その中で阿高貝塚出土の貝製仮面は最も古い縄文時代中期(約4,000年前)のもので、三つの穴で目と口を表している仮面は他にありません。この仮面は何に使ったのでしょうか。仮面にヒモを通す穴がないことからお祭りするなどして、日常ではない特別な行事に使っていたとも考えられますが、詳しいことはわかっていません。

貝製仮面の出土は現在のところ国内では九州のみで、韓国と中国に出土例があることから、海を越えた場所とも交流があったことがわかります。「モノ」が行き来するばかりではなく、形にできない「ところ」の交流もあったのでしょうか。

(考古担当:稲津)



蒸気機関車69665号機 ナンバープレートの秘密



博物館の屋外展示場にある機関車は、通称96形(キューロク、クンロク)とよばれ、大正年間(1912~1926)に貨物用として770輻造られたものの一つです。昭和15年から熊本~大分間の豊肥線を30年以上も活躍した最も熊本にゆかりのある機関車です。大正12年(1923)に造られてから昭和48年(1973)に廃車するまでの走行距離は2,538,921kmに達し、地球63周分にもおよびました。この蒸気機関車(貨物運搬用)の、正面・側面・後方には「69665」と記されたプレートがあります。今回は、この「数字の意味」について紹介いたします。

蒸気機関車は、構造や形状などによって『形(形式)』に分類されるのですが、本機は『9600形』の車輛です。同時代の旅客用蒸気機関車には『8620形』というものがあり、数字表記だけでなくアルファベットと数字を組み合わせた『D51形(通称デゴイチ)』などもよく知られています。

9600形の1番機のプレート番号が「9600」、2番機が「9601」、3番機が「9602」で、あとは順に数字が1ずつ増えて100番機が「9699」です。要するに、下2けたの数字に1を足した数が製造順番号になるのです。そして、101番機…。これを9700とすれば、既にあった『9700形』蒸気機関車の1番機と区別がつかなくなります。そこで、96100でもなく、百の位の1をプレート番号の先頭(一万の位)に付けて「19600」としました。これは、形(形式)を表す『96』の数字・位、ともに変えなくてよい表記方法でした。

それでは、プレート番号「69665」に戻りましょう。『96』の前に付いた6が百の位の数を表し、下2けたが65ですから、製造順番号は665+1=666となります。つまり、屋外展示場の蒸気機関車は「9600形の666番目に造られたもの」となるのです。ちなみに、この形(形式)の最終製造機である770番目の車輛には、プレート番号「79669」が付いていました(「79669」製造順:769+1=770)。

(理工担当:山口)

熊本博物館
KUMAMOTO CITY MUSEUM

くまはくNEWS LETTER Vol.8

発行 熊本博物館

〒860-0007 熊本県熊本市中央区古京町3-2
TEL.096-324-3500 FAX.096-351-4257
kumamoto-city-museum.jp



アンハングエラ
(佐賀県立宇宙科学館所蔵)

Vol. 8

くまはく
NEWS
LETTER

トッブクスアラ
(天草市立御所浦白亜紀資料館所蔵)

熊本博物館創立70周年/KKT熊本県民テレビ開局40周年記念特別展

世界の大翼竜展

7月16日(土)~9月4日(日)

これからもずっとくまはく

熊本博物館 70th
KUMAMOTO CITY MUSEUM SINCE 1952

2022年5月

■ 特別展案内

世界の大翼竜展

■ 展示会報告

能楽伝承—熊本の能文化—

くまはくコレクション 肥後のやきもの

■ 特別展示

「はやぶさ2」帰還カプセル特別公開

■ イベント報告

くまはく誕生月間

■ 資料紹介

貝製仮面(考古)

蒸気機関車(理工)

特別展案内

【夏季特別展】世界の大翼竜展

2022年7月16日(土)～9月4日(日)

1992年、日本2例目の翼竜化石が熊本で発見されました。本展では世界各国で見つかった翼竜化石からその特異な姿や進化・系統および古生態を紹介し、九州を中心に国内で見つかった翼竜化石も展示します。

(地質担当:南部)



企画展報告

【企画展】能楽伝承—熊本の能文化—

2021年12月18日(土)～2022年2月13日(日)



本企画展は熊本で育まれた豊かな能文化をテーマとして企画しました。指定後初公開となった熊本県指定重要文化財「金春流中村家能楽等関連資料」を交え、熊本の能楽がたどってきた歴史の一端をご紹介します。

第一室では中世菊池氏に由来する「菊池御松囃子」関連資料のほか、加藤清正の能楽関連資料などを展示しました。清正是金春流の秘伝を受けていた中村政長を熊本に招き、藤崎八幡宮の祭礼に能楽を取り入れるなど、能楽文化の定着を果たしました。また、能楽に傾倒していた細川三斎(忠興)らによる写本、細川家と中村政長との交流を示す書状などを展示しました。第二室では細川家老・松井家が北岡神

社に奉納した能面、松井家に伝来した能装束などを展示しました。その他、中村家が、熊本での能楽伝承に果たした役割を示す古文書なども展示しました。

おかげさまで会期を通じ、たくさんの方にご観覧いただきました。今後も熊本の歴史・文化をテーマとして、さまざまな企画展を企画したいと思っております。

(歴史担当:木山)

【収藏品展】くまはくコレクション 肥後のやきもの 2022年3月12日(土)～5月8日(日)



令和4年(2022年)3月12日(土)～5月8日(日)の会期で、収藏品展「くまはくコレクション 肥後のやきもの」を開催しました。小代焼や八代焼など、当館が収蔵する熊本県域で生産された多種多様なやきものを初めて網羅的に公開したこの展覧会。「熊本博物館にこんなやきものがあったの?!」という驚きの声や、「うちにも似たようなやきものがあるよ」といったお声を多数いただき、収藏品を広くご紹介する良い機会となりました。

今回の展示に至るまでに、専門家を招いて約2年にわたる収蔵陶磁器類の悉皆調査を実施しました。当館70年の歴史の中で収蔵されてきた150件近くの陶磁器類について情報を再整理し、写真撮影など現状を詳細に記録していきました。これにより、当館には実にバラエティ豊かな熊本のやきものが収蔵されていることがわかりました。

資料の情報を蓄積し、整理し、公開し、次の世代に引き継いでいくことは博物館の重要な役割。その作業には多くの時間と労力がかかりますが、これからも常設展や企画展などで当館の“コレクション”をたくさん公開していきたいと思っています。

(美術工芸担当:竹原)

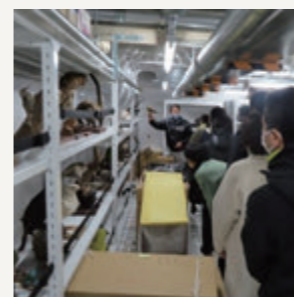
イベント報告

くまはく誕生月間

1952年2月に開館した当館は、毎年2月を「くまはく誕生月間」として、さまざまなイベントを開催しています。今年は記念すべき創立70周年!期間中、3回ご来館され、スタンプを集めた方にはアンモナイトをプレゼントする企画も行いました。なんと開始3日目には早速アンモナイトをゲットされていたお客様もいらっしゃいました。

火おこし体験で昔の人々の生活を少し想像してみたり、顕微鏡を使って普段は見えていなかった世界をのぞいてみたり…。工作を行うイベントでは、苦戦しながらも一生懸命取り組み、楽しんでいる様子が見られました。イベントを通して「くまはく」の魅力がたくさんの方に伝わっていたらとても嬉しく思います。ご来館、ご参加くださったみなさま、本当にありがとうございました。

(植物担当:山口)



↑収蔵庫にて剥製の解説



↑処置室にて文書修復の解説

リニューアル後初開催!!

バックヤードツアー

普段は見ることのできない博物館の裏側を見学できるバックヤードツアーを開催!午前の回は動物、化石・鉱物、植物に関する標本を保管している自然史系の収蔵庫を見学し、午後の回は古文書や民具、遺跡から発掘された遺物など熊本の歴史に関する人文系の収蔵庫を見学してもらいました。収蔵庫をはじめ、特別展示室の裏側やトラックヤード、作業部屋など展示室とは違う雰囲気を感じてもらいながら、博物館の資料を保存・管理する一面も感じてもらうのではないかと思います。各収蔵庫では担当学芸員の資料紹介や普段の仕事内容の説明もあり、大いに盛り上がるイベントとなりました。

(保存科学担当:坂本)

2022年2月1日(火)～2月27日(日)



特別展示

「はやぶさ2」帰還カプセル特別公開

2022年2月25日(金)～3月1日(火)

本展では2020年12月6日に地球に帰還した、小惑星探査機「はやぶさ2」の帰還カプセル(レプリカ含む)を展示しました。2011年11月の「はやぶさ」帰還カプセル公開と同様、熊本県では初めての実物展示ということもあり、5日間という大変短い期間ではありましたが3000人以上の方にご来場いただきました。

この展示に合わせ、プラネタリウムでは迫力の映像と共にはやぶさ2のミッションを解説する番組「HAYABUSA 2-REBORN-」の放映を行いました。番組を観覧してから展示を見ることで、観覧前とは帰還カプセルの見え方が変わった方も多かったようです。

また、2月27日(日)には崇城大学工学部小林健児准教授による天文講演会「宇宙旅行の過去と将来～宇宙旅客機の実現性」を開催しました。人類がはやぶさ2のように他の星へと旅ができるような日が来るのか、といった宇宙旅行をテーマにロケットの開発の歴史から現在の宇宙旅行事情まで幅広くお話いただきました。はやぶさ2の展示をきっかけに宇宙に興味を持った方にも楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

(天文担当:野村)

